

ウイーン発の中世グローバルヒストリー…

ヨハネス・プライザーIIカペラー博士連続講演会

小澤 実・諫 早 庸 一

はじめに

二〇一九年一月二日から二四日まで立教大学招へい研究員（受入教員…浦野聡）として、オーストリア科学アカデミー上級研究員のヨハネス・プライザーIIカペラー博士と、一三日から二四日まで科研費海外研究協力者（受入教員…小澤実）として、同研究員（現在はゲッティンゲン科学アカデミー研究員）のエカテリーニ・ミツイウ博士の夫妻が招聘された。両博士はいずれもビザンツ帝国を専門とし、現在は精力的にウイーンを拠点として中世グローバル

ヒストリーを推進している。一ヶ月に満たない滞在期間中、プライザーIIカペラー博士は東京・札幌・大阪で合計六回の報告を、ミツイウ博士は東京と大阪で二回の報告を行った。今後両博士の研究を直接紹介する機会もあるかと思われるが、本稿では、特集の性質に鑑み、彼らとりわけプライザーIIカペラー博士が進めるウイーン発の中世グローバルヒストリーの研究概要を紹介しておきたい。小澤が全体の梗概を、諫早が一月五日の東京講演と一日の札幌講演について詳細なレポートをまとめる。

一 両博士の研究経歴

プライザー・カペラー博士は一九七七年に下オーストリアのツヴェットルに生まれる。二〇〇六年にウィーン大学のオットー・クレステンとヴェルナー・ザイプト両教授のもとで、パレオロゴス期コンスタンティノーブル総大主教管区の総大主教並びに主教のプロソポグラフィイ研究で博士号を取得し、現在はオーストリア科学アカデミーのビザンツ研究部門で上級研究員をつとめる。専門はビザンツ帝国史だが、とりわけネットワーク理論との出会いからデジタルヒストリーを利用したグローバルヒストリー研究に足を踏み入れ、現在は環境史の観点から独自のグローバルヒストリー研究を進めている。膨大な数の編著と論文が刊行されているが、主要著作として『後期ビザンツ帝国の主教座制度』(Der Episkopat im späten Byzanz. Ein Verzeichnis der Metropolen und Bischöfe des Patriarchats von Konstantinopel in der Zeit von 1204 bis 1453, Saarbrücken, 2008) ならびに『ローマとカール大帝の彼方』(Jenseits von Rom und Karl dem Großen. Aspekte der globalen Verflechtung in der langen Spätantike, 300-800 n, Wien, 2018) がある。現在は中世環境史の単著を準備中と聞いている。

史苑(第八〇巻第二号)

エカテリーニ・ミツイウ博士は一九七三年ギリシア共和国のヨアニナで生まれる。ヨアニナ大学で学士号を取得したのち、二〇〇八年にウィーン大学のヨハネス・コーダー博士とオットー・クレステン両博士のもとで、ニカイア帝国における経済とイデオロギーの関係の研究で博士号を取得した。現在はゲッティンゲン科学アカデミーの研究員をつとめる。専門は、当初ビザンツ帝国における社会経済史や女子修道制であったが、近年は夫のヨハネス・プライザー・カペラーとともに環境史の共同研究が多い。また、ゲッティンゲンではビザンツ法のプロジェクトに従事している。彼女もやはり膨大な数の論文を刊行しており、主要編著として『皇帝ジギスムントと正教世界』(Emperor Sigmund and the Orthodox World, Wien, 2010) や『中世東地中海の女性と修道制』(Women and Monasticism in the Medieval Eastern Mediterranean: Decoding a Cultural Map, Athens, 2019) などがある。現在はビザンツ帝国における女子修道院の単著を準備中である。

二 両博士の来日講演記録

必ずしも長期とは言えない滞日中、プライザー・カペラー博士は六回の、ミツイウ博士は二回の報告というハ

ウィーン発の中世グローバルヒストリー（小澤・諫早）

ドスケジュールであった。それもプライザーIIカペラー博士は、立教大学、北海道大学、大阪市立大学、大阪大学で、ミツイ博士は立教大学と大阪市立大学という地理的にも広範囲に至る研究機関での報告であった。この回の報告でコアとなるのは、立教大学で行われた連続講演「環境から見た中世グローバルヒストリー」とシンポジウム「中世の帝国」である。前者は博士が近年最も力を入れている環境史データを用いた中世世界の動態の見直しであり、後者は他地域それもウィーンではスタッフの関係上十分な議論を積み重ねることのできないユーラシア他地域の専門家との比較史の試みであった。

以下、プログラムを略述しておきたい。

(1)

一月五日（火）@立教大学池袋キャンパス
公開講演会「環境から見た中世グローバルヒストリー1」
報告者：ヨハネス・プライザーIIカペラー
「二四世紀の「大移行」と「小氷期」——西欧を超えた比較視点——」(The “Great Transition” and the “Little Ice Age” – a comparative perspective on the 14th century CE beyond Western Europe)
コメント：諫早庸一（北海道大学スラブ・ユーラシア研究

センター）

司会：小澤実
主催：立教大学文学部史学科

(2)

一月一日（月）
@北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
報告者：ヨハネス・プライザーIIカペラー
「より広い世界のなかの新たなローマ——四世紀ビザンツとスラブ・ユーラシア世界との間の相互連環と遠隔相関——」(New Rome in a larger world – Entanglements and teleconnections between Byzantium and the Slavic-Eurasian world of the 14th century CE)
司会：諫早庸一
主催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

(3)

一月一日（金）@立教大学池袋キャンパス
公開講演会「環境から見た中世グローバルヒストリー2」
報告者：ヨハネス・プライザーIIカペラー
「火山、疫病、サクラ：初期中世アフロ・ユーラシア世界の絡みあうエコロジー」(Volcanoes, plagues

and cherry blossoms. Entangled ecologies of early medieval Afro-Eurasia, 500-900 CE)

コメント：津田拓郎（北海道教育大学）

司会：小澤実

主催：立教大学文学部史学科

(4)

十一月六日(土) @立教大学池袋キャンパス

報告者：エカテリーニ・ミツイウ

「ビザンツ世界における修道院、船舶、島嶼：聖なる空間

もつれ合いの歴史」(Monasteries, ships and islands in

Byzantium: a history of an “unholy” entanglement)

コメント：村田光司(名古屋大学)・赤江雄一(慶應義塾大学)

司会：小澤実

主催：立教大学文学部史学科

共催：科研費基盤A「前近代海域ヨーロッパ史の構築：

河川・島嶼・海域ネットワークと政治権力の生成

と展開」(研究課題 19H00546)：修道会史研究ネッ

トワーク

(5)

十一月十七日(日) @立教大学池袋キャンパス

西洋史研究会大会共通論題「中世の帝国：ネットワークの諸相」(Medieval Empires and their Networks)

導入：有光秀行(東北大学)

報告者1：ヨハネス・プライザールカペラー

「危機にある帝国形成：一一世紀のグローバルなコン

テクストにおけるビザンツ帝国と神聖ローマ帝国」

(Imperial formations in crisis: Byzantium and the

Holy Roman Empire in a global context of the 11th

century)

報告者2：小澤実

「ネットワーク化されたスカンディナヴィア世界におけ

る海上「帝国」の形成：交易中心地、船舶、イェリ

ング王権」(Making of a maritime “Empire” in the

networking Scandinavian World: trading centres,

ships, and the Danish Jelling dynasty)

報告者3：古松崇志(京都大学)

「一一世紀ユーラシア東方における多国体制と帝国」

(Empire and multilateral system of eastern

Eurasia in the 11th century)

コメント：高田良太(駒澤大学)・四日市康博(立教大学)

司会：有光秀行(東北大学)・鈴木道也(東洋大学)

主催：西洋史研究会 共催：立教大学文学部史学科・科

ウィーン発の中世グローバルヒストリー（小澤・諫早）

研費基盤研究A「前近代海域ヨーロッパ史の構築：
河川・島嶼・海域ネットワークと政治権力の生成
と展開」（研究課題 19H00546）

(6)

一二月一九日（火）@大阪市立大学杉本キャンパス

ワークショップ「世界史における東地中海」（Workshop:
The Eastern Mediterranean in the World History）

報告者1：エカテリーニ・シシイウ

「亡命するビザンツ宮廷：いわゆるニカイア帝国におけ
る帝國的空間 一二〇四-一二六一年」（Byzantine
courts in exile: imperial spaces in the so-called
Empire of Nicea, 1204-1261 CE）

報告者2：ヨハネス・フライザーIIカペラー

「宮廷を給養する：初期中世アフロ・ユーラシア世界にお
ける都市メタボリズムと大規模帝国センターの比較」
（Feeding palaces: urban metabolisms and large-
scale imperial centres across early medieval Afro-
Eurasia in comparison）

報告者3：片倉綾那（大阪市立大学）

「一二世紀ビザンツ宮廷における皇女の政治的役割」
（The political role of Komnenian princesses at the

Byzantine court in the twelfth century）

司会：北村昌史（大阪市立大学）・草生久嗣（大阪市立大学）
主催：大阪市立大学大学院文学研究科プロジェクト「東地
中海世界の歴史的展開を、古代から現代に至るま
で通時的に再検討する」共催：科研費基盤研究A
「前近代海域ヨーロッパ史の構築：河川・島嶼・海
域ネットワークと政治権力の生成と展開」（研究課
題 19H00546）

(7)

一二月二二日（金）@大阪大学豊中キャンパス

第八五回グローバルヒストリー・セミナー

報告者：ヨハネス・フライザーIIカペラー

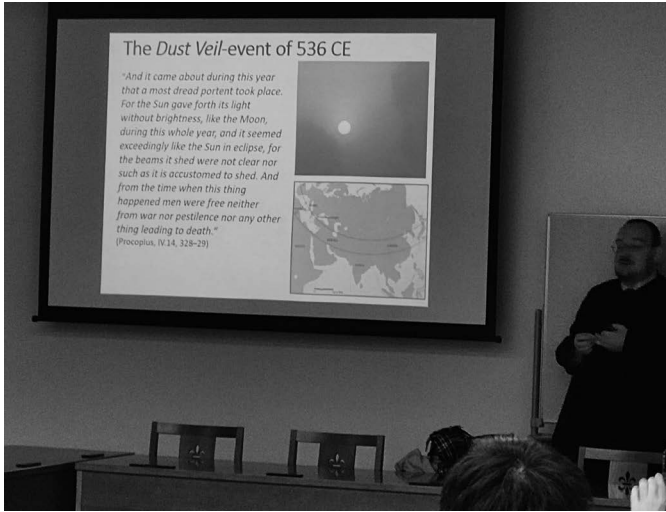
「帝国・崩壊・エコロジー：「長い古代末期」（四-一世紀）
を通じての比較視野」（Empire, Collapse and
Ecology. A comparative view across Afro-Eurasia
during “Long Late Antiquity” (4th-11th century
CE)）

司会：早川尚志（大阪大学）

主催：大阪大学大学院文学研究科 共催：科研費基盤研究
A「前近代海域ヨーロッパ史の構築：河川・島嶼・
海域ネットワークと政治権力の生成と展開」（研究

課題 19H00546)

両者の講演のうち、ブライザー||カペラー博士の報告は、極めて特徴的なプロトコル備えていたので記しておく。博士は、報告に先立って、膨大な分量の資料を配布す



11月15日@立教大学

る。その資料は、要点と参考文献を記したレジюме、当日使用するパワーポイントのデータ、報告内容に関連する既刊論考から構成されている。さしあたりレジюмеを読んでおけば博士の報告内容の概要を知ることができるが、重要なのはパワポデータと添付論考である。博士は一時間程度の講演で、百枚前後のスライドを矢継ぎ早に映し出しながら口頭報告を行うというスタイルをとる。したがって一枚のスライドにかける時間は数十秒であるが、そのスライドは、地図、グラフ、史料引用などが細部に至るまで書き込まれた情報密度の高い内容を持っており、手元に置いて再三再四目を落とさなければとてもではないが理解がおぼつかない。添付される論考は、報告を聞く前に目を通しておけば格段に報告に対する理解が深まる。私が博士の所属するオーストリア科学アカデミーで報告した際も事前に報告原稿と関連論文の提出が要求されており、ウィーン⁽²⁾の報告プロトコルは、単なる経過途上報告やアイデア提示ではなく、前提知識を踏まえた参加者との議論を通じて研究内容を進展させようとの態度がはっきりと読み取れる。

なお博士は講演で用いたパワポデータは作成直後に Academia.edu にアップし、研究報告内容を共有する Academia.edu に登録している。サイトからのダウンロード数は、

ウィーン発の中世グローバルヒストリー（小澤・諫早）

もトップクラスであると思われる。ツイッターやフェイスブックを用いたコミュニケーションも積極的に試みており、インターネットというグローバルイズムを支える技術を最大限に利用した研究者でもある。



11月17日@立教大学

三 プライザー||カペラー博士の中世グローバルヒストリー

現在、中世グローバルヒストリーの中心の一つとなっているウィーンの知的風土の中で研究を進めるプライザー||カペラー博士の研究姿勢を理解するためには、オーストリア科学アカデミーの中世研究について触れておかねばならない。そしてその中心にいるヴァルター・ポール博士とクラウディア・ラップ博士の役割についても整理しておかねばならない。

一九五三年生まれのポール博士は、ウィーン大学で博士号を取得したのち、伝統ある同大学ならびにオーストリア科学アカデミーの中世研究所 (Institut für Mittelalterforschung) にポストを得た。中世研究所は、一八五四年以来の伝統あるウィーン大学付属オーストリア歴史研究所 (Institut für Österreichische Geschichtsforschung) とオーストリア科学アカデミーを基盤としており、初期中世史家でありポール博士の指導教員でもあるヘルヴィヒ・ヴォルフラムが研究所長をつとめている一九九八年にアカデミー内の一部門として設立された^③。研究の中核は、師のヴォルフラムと同様にゲルマン人民族移動期におけるエスニシティ生成であり、とりわけヨーロッパ、ビザンツ帝国、ユーラシアの狭間で活動を行っ

てきたアヴァール人の研究で名前を知られている。ゲルマン人に関する多数の個別研究や民族移動期に関する概論を複数刊行しているポール博士は名実ともに当該時代の第一人者である。



11月22日@大阪大学

ドイツ語圏の研究者がゲルマン人研究の第一人者たることは当然のように思われるが、ポール博士をその中でも一等抜きん出た存在として認知させるようになったのは、数々の大型研究資金による研究グループの組織によってである。ヨーロッパ規模でこの時代の研究水準を一挙に高めたのはヨーロッパ研究財団 (European Science Foundation) の援助を得た国際プロジェクト「ローマ世界の変容」(Transformation of the Roman World; 1993-98) であった。ポール教授は、イギリスのイアン・ウッドらとともに、共同討議を基にした複数巻の英文論集を公にした。初期中世史を専門とするものならば、ローマ帝国の崩壊をローマ帝国の変容と読み替え、初期中世研究に大きな質的変化をもたらしたこの共同研究の意義は十分に認識できるだろう。

率直に言ってドイツ語圏、フランス、イタリア、スペインといったそれなりにオーデイエンスがあり、なおかつナショナルな意識の高い国においては、わざわざ研究を英語で刊行するインセンティブは小さい。翻訳を待つか、せいぜい英語圏に招聘された時に講演というかたちで自分の研究を公にするのが通例である。しかしポール博士は、本人が代表者もしくは分担者となる国際共同(学際)研究に名を連ね、若手研究者を共同研究者に採用し、あえて英語に

ウィーン発の中世グローバルヒストリー（小澤・諫早）

よる成果報告をウィーンの中世史グループに課した。そして、インターネットによる情報拡散性を十分に熟知した上で、英語によるオープンアクセスのインターネット学際雑誌『中世諸世界』(Medieval Worlds)を刊行した^⑧。加えて、ウィーン大学歴史学部は、長年アメリカの大学で教鞭をとったフランス人西洋中世史家フリップ・ビュックとドイツ人ビザンツ史家クラウディア・ラップをスタッフとして迎えた。質を伴った英語発信性という点においては、ウィーンは今や随一の中心地となっている。プライザーIIカペラー博士が博士号を取得しポストを得たウィーンは、ドイツ語圏としては珍しく、すでにこのような「英語圏」であったことを私たちは思い起こさねばならない。

以上のような環境の中でビザンツ帝国の研究を始めた博士は、博士号取得までは特にグローバルヒストリーを前面に押し出す研究者ではなかった。もちろん、「グローバルな中世」のリーダーであるオックスフォードのキャサリン・ホームズがそうであったように、『ケンブリッジ版世界史』にグローバルな観点のビザンツ帝国論を寄せたパリのジャンIIクロード・シエネがそうであったように、帝国という点で前近代の様々な帝国と比較され広域国家という点でネットワーク性と隣接集団との関係が常に問われるビザンツ帝国の研究そのものが、あえてそうだとは言わなくても

グローバルヒストリーの要素を内包している、と言えるがうではあるが。

博士の膨大な研究を整理するのは難しいが、瞥見した限りで読み取ることのできたそのグローバルヒストリーとの親和性を、博士の研究経歴の時系列に沿って指摘しておきたい。

(1) ビザンツ帝国によるアルメニアの行政支配に関する修士論文をしたために、ユーラシア世界を含めたビザンツ帝国と外部世界との関係を重視^⑨。

(2) 博士論文では、オーストリア国立図書館に所蔵される『コンスタンティノーブル総主教座文書記録簿』(The Register of the Patriarchate of Constantinople)の情報に基づき、計量可能なビザンツ後期の主教プロソポグラフィ・データを構築^⑩。

(3) 計量的データをベースにネットワーク理論を駆使し、帝国の都市や港湾を通過して国内内外へと移動する人間や物資の流れを量的かつ視覚的に提示^⑪。

(4) プリンストン大学の「気候変動と歴史研究イニシアティブ」(Climate Change and History Research Initiative)と連携しながら、前近代における気候変動のデータと地域ごとの歴史プロセスを接合し、国内内

外の歴史変動を再構築¹⁴⁾。

博士の名著の一つ『ローマとカール大帝の彼方』は、博士の専門である中世後期からは大きく離れた初期中世を対象にはいるものの、(1)から(4)の特徴を全て備えたアフロ・ユーラシア世界の中における初期中世世界を描き出しており、中世グローバルヒストリーの具体的成果である。

現在もウィーンでは、ポール博士が代表をつとめる共同研究「共同体のビジョン」(Visions of Community. Comparative Approaches to Ethnicity, Region and Empire in Christianity, Islam and Buddhism, 400-1600 CE (VISCOM), 2011-2019) ならびにラップ教授による「移動するビザンツ帝国」(Moving Byzantium: Mobility, Microstructures, and Personal Agency in Byzantium, 2015-2021) とごう、英語を共通言語とした国際中世プログラムが走っており、ブライザー・カペラー博士は有力な共同研究者として貢献している。それ以外にも、イギリスやアメリカの研究プロジェクトにも名を連ね、積極的に英語で成果を発表している。ブライザー・カペラー博士の関心が、英語圏で圧倒的に強いデジタル・ヒストリー、ネットワーク理論、環境史などと重なっていたこともあるだろうが、ビザンツ史・中世史の世界的中心地の一つウィーン

の学的蓄積を、英語を通じてアカデミア全体に還元することで、博士はウィーンそのものを中世グローバルヒストリーの研究ハブの一つとしている。

以上、簡単な解説を試みた。最後に、第一講演と第二講演に関する諫早のレポートを掲載することにより、ブライザー・カペラー博士の研究の狙いと、ウィーン発の中世グローバルヒストリーのスタイルを想起してもらいたい。

四 東京講演と札幌講演 (諫早庸一)

(一) 東京講演

一月五日(火)立教大学池袋キャンパスにて行われたブライザー・カペラー博士の日本での最初の講演会は素晴らしいものとなった。まずはオーガナイザーであり、私をコメンテータに指名して下さった小澤実教授に深く感謝したい。以下、当日の講演とコメント及びその後の議論のあらましを記す。

講演内容

ビザンツ帝国史を専門とするブライザー・カペラー博士が、連続講演会「環境史からみた中世グローバルヒストリー」の初回で扱ったのが一四世紀である。西欧におい



11月5日@立教大学

て一〇—一三世紀の間に続いた「中世温暖期」(Medieval Climate Optimum) は終わりを迎え、その後には気候の変動期が訪れる。一四・一五世紀にはグリーンランドにあったヴァイキングのコロニーが放棄されたと言われ、一三六二年には「大量溺死」(Grote Mandenke)として語り継がれる大洪水がドイツ北部を襲う。一三一五—一七一年にイングランドを襲った飢饉は歴史的な被害をもたらす。一三四六年にクリミアで爆発が始まるペスト大流行はヨーロッパ全土の人口を激減させた。さらにプライザー＝カペラー博士は中欧における一三三七年の大彗星の目撃と翌三八年の蝗害がこの地でユダヤ人の迫害をもたらした事実を伝え、天災と人災の連鎖も語る。この種の「一四世紀の危機」はしかし、「マルサスの罠」的な文脈で言えば、飽和状態になった人口を減免させ、ヨーロッパの大跳躍を準備したものとなる。「一四世紀の危機」について現段階において研究の出発点となるキャンベルの『大遷移』(Great Transition) の議論もそのラインにあり、それはポメラニツが『大分岐』(Great Divergence) で語るような西欧の跳躍へと繋がっていく、これがプライザー＝カペラー博士が「古いシナリオ」(Old Scenario) と語るものである。

「ここからが議論です。」プライザー＝カペラー博士は

そのように語り、講演の後半部を始める。例えばイブン・バットウータ（一三〇四―一七七年）の『大旅行記』を紐解けば容易に分かるように、この世紀において西欧は世界の中心でも何でもなかった。彼は当時ユーラシア規模で張り巡らされたネットワークを伝い、世界を旅したのだ。その背景にはモンゴルによるユーラシア統合があった。そもそも、「中世温暖期」から「小氷期」(Little Ice Age)へ、というシナリオでもって一四世紀を語れるのは西欧だけだともプライザー・カペラー博士は言う。こうして、彼の専門である東地中海世界へと話が展開していく。一三一―一四世紀においてこの地域にブレゼンスを有していたのはビザンツ帝国であった。しかし帝国はすでに衰退のフェーズにあり、一二六一年のコンスタンティノープル奪還以降もすでに「帝国」とは言えない規模の政体となっていた。プライザー・カペラー博士はこの時期の帝国領内の気候データを丹念に検討する。例えば一三世紀において帝国北部にあたる黒海岸は極めて乾燥していたことが知られる。南部にあたるエーゲ海岸に至ってはすでに一一世紀には乾燥局面にあった。「中世温暖期」は東地中海には西ほどに恩恵をもたらさなかったのだ。ただし、中央ギリシアにおいて気候はかなり温暖であり、当時縮小傾向にあったビザンツ領内においてすら気候の地域差はかなりのものであったこと

史苑（第八〇巻第二号）

が強調される。その後、ビザンツ領内は疫病の流行に襲われることになった。いわゆるペストの「爆発」の前にも、一二二〇／二一年や四〇年にこの地域では大幅な人口減が見られる。これもまた人災と天災の「相互作用」(interplay)であった。そもそも当時のビザンツは党派争いの只中であり、こうした天災に中央政権がまともに取り組めるような状況にはなかったのだ。

このような状況が西欧と東地中海との間に「小分岐」(Little Divergence)を生んだというのがプライザー・カペラー博士の主張である。「大分岐」の前に、西部ユーラシアにおいても小規模の「分岐」が存在し、西欧の跳躍を準備していた。プライザー・カペラー博士による東地中海についての議論はひとえにキリスト教圏に留まらず、十字軍とマムルーク朝が交錯したシリアをもその射程に捉える。ナイル川の水位は低下の後に大幅な上昇に転じ、この時期の気候変動を裏付けている。さらに彼は議論を東部ユーラシアにも開いていく。一四世紀の地平において中国と日本にも「小分岐」が起きていると。これがのちの日本の跳躍を準備しているのだと彼は続けた。

キャンベルの議論に丁寧に沿いながら、その「古いシナリオ」を地域差に注目して再考し、より細やかな、しかし決定的な「小分岐」を見出して「新しいシナリオ」を描い

ウィーン発の中世グローバルヒストリー（小澤・諫早）

たプライザー・カペラー博士。まさに中世グローバル環境史の先駆となる貴重な講演であった。

諫早コメント

続くコメントで私が問うたのは以下の三点であった。

(1) キャンベルの「大遷移」は、「三世紀世界システム」(3rd-Century World System)と「大分岐」を繋ぐ議論となりうるのか

(2) 「一四世紀の危機」研究に「大きな思考」(big thinking)は適用可能なのか

(3) 文理協働はいかにして実現しうるのか

それぞれに対して、プライザー・カペラー博士はとても誠実に答えてくれた。(1)に関しては、ポメラントに限らず、「分岐」のタイミングに関しては百家争鳴の状況であると彼は語る。此処でプライザー・カペラー博士が語った印象的なポイントは、例えばポメラントの属する「カリフォルニア学派」が晒されている批判の一つに、彼らが拠る「経済指標」の怪しさがあると。彼らは限られたデータのしかも数値化できる部分しか議論していない。貨幣を介在させない実態経済に相当のプレゼンスがあった中世期において必然的に彼らの「数字」は信頼に足るものとはならないのだ、とプライザー・カペラー博士は指摘した。こ

うした「グローバル経済史」に比べれば遥かに、環境プロキシに基づく「グローバル環境史」には信頼性があるのだとも彼は続けている。(2)への回答もその延長線上にある。「古いシナリオ」に顕在化しているように、「大きな思考」に基づく「大きな構図」(big thinking)には常に危険が伴う。一方で、集められるだけの新しいデータを考察することで既存の構図を刷新していくことはできるのであるということであった。(3)については、プリンストン大学の「気候変動と歴史研究イニシアティブ」(Climate Change and History Research Initiative)に言及があった。プリンストンの高等研究所に籍を置く中央ユーラシア史家ニコラ・デイ・コスモもこのプロジェクトの中心メンバーの一人であり、プライザー・カペラー博士自身もこのプロジェクトの一員である。このプロジェクトの成果の刊行が待たれる状況となっている。

総合討論・論点

その後に議論がフロアに開かれた。最初の議論は、そもそも「一三世紀世界システム」と「大分岐」の議論を同じ土俵で議論できるのか、というものであった。世界システムとは循環(circulation)と交換(exchange)に象徴される「一つの世界」体系であり、その変化は「中心のシフ

ト」で表現される。それと「二つの世界」の「分岐」とはそもそも位相の異なる議論なのではないかとの指摘であった。次に議論に上ったのは火山であった。プライザー・カペラー博士は冒頭で「一二五七年」におけるインドネシアはロンボク島にあるサマラス山の巨大噴火のユーラシア規模での影響に言及したが、火山データには現在も「揺れ」がかなりあり、数十年規模で発生年がずれることもあるとの指摘が為された。そもそも、それを裏付ける文献データも特に一四世紀において継続的には望めないなかで、その影響をどのように措定しうるのかとの質問であった。加えて文化的な側面からの質問も出た。一四世紀はイタリアにおいて「ルネサンス」の契機とされているが、こうした文化的な復興と環境変動には相関があるのかという質問であった。最後の質問は、ユーラシアの東西比較、特に「戦い」に関するものであった。プライザー・カペラー博士はそれに関してビザンツがイスラーム教や十字軍とは異なり、「聖戦」の概念を最後まで発展させなかったという興味深い指摘をしている。

最後にもう一つ重要だと思われた論点に触れさせていた。先私が開催した「一四世紀の危機」についてのワークショップ²⁰において、その場ではうまく答えられなかった指摘として以下のものがあつた。「一四世紀の危

機」のなかで多くの政体が倒れ、ユーラシアは転換期を迎える。その時代は一方で、例えばティムール朝（一二七〇—一五〇七年）であるとか、明朝（一三六八—一六四四年）のような「元氣な勢力」が出てくるタイミングでもある。こうした、「危機」のなかの「元氣な勢力」をどう考えれば良いのか、という指摘であつた。プライザー・カペラー博士はこの指摘に対し、オスマン帝国を事例に興味深い返答してくれた。先行研究のなかには、オスマン帝国はペストの影響をほとんど受けなかったとするものもあるが、実際にはかなりの影響を受けていたと思われる。しかも一四〇二年のアンカラの戦いでティムールに決定的な敗北を喫して帝国は危険な状況に追い込まれる。こうした状況を乗り越えてオスマン帝国を地中海帝国へと押し上げた要因としてプライザー・カペラー博士は「大規模な糾合」(large-scale integration)を挙げた。オスマン帝国はムスリムのみならず、むしろ非ムスリムも広くその政体に取り込んで持続可能な支配体制を築いたのでとの議論であつた。

(2) 札幌講演

博士の第二講演「より広い世界のなかの新たなローマ—一四世紀ビザンツとスラブ・ユーラシア世界の間の相互



11月11日@北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

連環と遠隔相関——も成功裏に幕を閉じた。第一講演と同じく一四世紀に焦点を当てながらも、環境史が中心だった前回とは異なり、ネットワーク考察が主題となった。

講演内容

一三一—一四世紀におけるモンゴルの拡大は、アフロ・ユーラシアの秩序を再編することになる。あらたな、そして強大な隣人と相対することになったビザンツ帝国（三三〇—一四五三年）は、領土の縮小に苦しみながらも、この再編の中でバランスを取りながら存在感を発揮していく。モンゴル帝国の分裂以降は、奴隷交易で関係を深めた金帳ハン国（一二四二—一五〇二年）とマムルーク朝（一二五〇—一五一七年）とに対しては両者の交易の中継地点にあたる黒海交易を保全して関係を良好に保った。一方で、この両国と敵対したイル・ハン朝（一二五六—一三五七年）に対してもビザンツは積極的な外交政策を取った。（非嫡出の）皇女マリアを第二代イル・ハンであるアバガ（治世一二六五—一二八二年）に嫁がせたのもそのような政策の一環であった。こうした状況下において、ビザンツが戴くギリシア正教会は「アンティオキアおよび全東方の総主教庁」であるアンティオキア総主教庁——当時はその高位者の多くがコンスタンティノープルに「亡命中」——を中心に東

方進出を図る。彼らはすでに八世紀以降カトリコスを遠くサマルカンドまで派遣していた。

一方でローマ教会もまた東方進出を図っていた。その先兵となっていたのがドミニコ会やフランシスコ会のような托鉢修道会である。彼らはギリシア正教会以上に異教徒の地における自らの活動を正当化していた。後代イル・ハン朝の首都となったスルターニーヤに大司教座を置いたローマ教会は、遙かサマルカンドやインド亜大陸南端までの進出を企図したが、一三三六年以降のイル・ハン朝の分裂に起因する政治混乱がそれを許さなかった。ただし、ローマ教会の教区ネットワークは結果としてギリシア正教会のそれを凌ぎ、東方においてよりプレゼンスを発揮することとなる。フランシスコ会の修道士であったプラノ・カルピニ（一二八二—一二五二年）は教皇の命を受け、教区を拡大すべくモンゴル帝国の首都カラコルムまで赴いている。

一方、北方のスラブ世界へと目を転じると、その地を支配していた金帳ハン国領域にもギリシア正教会の伸長を見ることが出来る。ビザンツは帝国の領域を北方から荒らしていたブルガールやセルビア勢力を抑えるため、こちらの勢力と結ぶ必要があったのだ。特にクリミアにおいて金帳ハン国から半ば独立した勢力を築いたノガイ（一二九九年没）とは姻戚関係を結び関係を強固なものとしていっ

た。彼が金帳のハンに敗れると多くの亡命者がビザンツへと流れることになる。さらに、コーカサス地域において注目に値するのがアラン人である。一〇世紀にはキリスト教化していた彼らは、ウルゲンチ方面にも広がっていたことが知られ、さらにモンゴル時代には遠くカラコルムまで至っていたことを、フランシスコ会のギヨーム・ルブルック（一二二〇頃—一二九三年頃）は伝えている。さらに元朝（一二七一一—一三六八年）の史料は「アス（阿速）」の名で彼らがキリスト教徒として、さらには皇帝の親衛隊として三万人規模の衛兵団を組織していたことを伝えるのである。

その後、一四世紀の中葉になるとペストの大流行がヨーロッパを直撃する。すでに内憂外患に苛まれていたビザンツ帝国は此処にさらなる縮小を余儀なくされていた。しかし、こうした局面においても少なくとも精神的な面においてコンスタンティノーブル総主教庁は依然としてエキュメニカルな存在として自らを主張し続けていく。退位後に僧侶となった皇帝ヨハネス六世カンタクゼノス（治世一三三七—一五四年）は、一三六七年には教皇に教会の大統合を呼び掛けてもいる。今はウィーンの国立図書館に所蔵されている二写本（いわゆる『コンスタンティノーブル総主教座文書記録簿』）はこの時代（一二三二—一四〇二年）

のコンスタンティノーブル総主教庁が発給した、一三一五年から一四〇二年に至るまでの実に八〇〇以上に及ぶ文書を収録しており、この講演の主題に関わる極めて貴重な史料群となっている。

その後、アラニアのシメオン（一四世紀中葉活躍）や、コンスタンティノーブルから東方を遍歴しローマに至ったパウロス・「パレオロゴス」・タガリスの旅路（一三六三—九四年）がネットワークモデルでトレースされる。しかし、この時代以降には宗派を問わず、キリスト教会のネットワークは縮小していくことになった。一五世紀初頭にはティムールの使節として西洋に赴いたスルターンニージャ大司教のヨハネスの存在が知られるが、それはカトリックが東方から引いていく最後の局面にあたっていた。こうした波が引いた後にやってきたのがオスマン帝国（一二九九—一九二二年）である。一四五三年のコンスタンティノーブル包囲において、一四〇二年の「ティムールの奇跡」はついに再来せず、この地は陥落する。以後はオスマン帝国スルタンが、東方のハンと西方の皇帝との双方を表象する新たな時代が訪れるのであった。

質疑応答

多くの学生たちの出席にも恵まれ、質疑も大いに盛り上

がった。まずは小澤教授が、キリスト教共同体のなかで異なる宗派間——例えばローマ・カトリックとギリシア正教——や東方でのコミュニケーション言語とはどのようなものであったのか、という質問で討論の口火を切った。その点に関しては、やはり困難が常に伴ったとブライザーIIカペラー博士は返答する。例えばタブリーズでシャムス・アッディーンに天文学を学んだグリゴリオス・キオニアデスなどは明らかに東方言語を知悉しており、理想の人材と言えたが、必ずしもそういうケースばかりではなかったと。時には全くその地の言語に通じていない人物が派遣されることもあったとのことであった。

次に私が質問したのは、「東方」においては最終的にはローマ・カトリックの方が、ギリシア正教よりも長くその地盤を保つことに成功したわけだが、その要因は何か、ということであった。答えとして——すでに講演内容のところで書いたが——やはり托鉢修道会の存在は大きかったであろう、という返事であった。彼らの「宣教」は異教の地の活動をより正当化していたのだ。

その後には長縄教授の質問が続いた。一四世紀は「危機」の時代と言われるが、一方でオスマン帝国に象徴される新興勢力の伸長期でもあったことを確認し、この相関をどのように考えるのかという質問であった——この点は先の

ワークシヨップでも宇山教授が指摘しており、やはり非常に重要なポイントであるとの認識を強くした。プライザーIIカペラー博士の今回の答えは、例えばイブン・ハルドウーンの「アサビーヤ論」のようなサイクルを考えることもできるだろうというものであった。一方で、例えばこの時代には依然として異教徒であったリトアニアはカトリックと正教会との間で立ち回り、この時期に勢力を伸長させる。オスマン帝国もそうだが、この時期に教義や理念に縛られていた旧勢力に対してより現実的な路線を進んだ勢力が拡大したという傾向は見られるのだとの回答であった。

次には再び私が発言し、この講演のサブタイトルにあった「遠隔相関」(teleconnections)の意味を問うた。この用語は、まずは環境史の用語で「エルニーニョ・南方振動」のような遠隔地同士の相関を示すものであるが、プライザーIIカペラー博士の示したネットワークにはそうした「遠隔相関」は見られるのかと質問した。プライザーIIカペラー博士は、「遠隔相関」は確かに見られると。例えば情報がそれにあたるのとことであつた。ヨーロッパに遠く元朝中国についての情報がもたらされ、それがローマ・カトリックの政策などにも影響を及ぼすことにもなつたのである。

次には再び小澤教授が、アラン人のところで彼らを「ソ

グド」と呼ぶ西方史料が引かれていたが、これをどう理解すればよいのかと質問した。ソグドは一一世紀には中央アジアにおいてほぼ姿を消している。プライザーIIカペラー博士はその通りであると答える。ヨーロッパ史料においては時としてこの種のアナクロニスティックな記述が見られるが、それは例えばその地に長きに亘って活動していたアルメニア教徒などの記述を一四世紀の時空に当てはめるようなケースであると。さらには、ビザンツ史料にはモンゴルを「トハラ人」と表現するような興味深い事例も見られるとの補足もあつた。

次はタイムール朝史を専門とする学生の方が質問をしてくれた。今回の話はキリスト教会による西方から東方への進出についてのものであつたが、東方から西方はどうかとの質問であつた。例えばタイムールの征服の話はすぐに西方に伝わっている。プライザーIIカペラー博士はその通りであると答えてくれた。東方から西方への事例は沢山あると彼は続ける。そのなかで興味深いのは「公的」チャンネル以外にも「私的」なものもかなりあり、時には相当胡散臭いものもあるのだと彼は答えた。例として挙げられたのが一四三九年フィレンツェに突如として現れた「エチオピア王」からの使節団である。彼らは教皇から巧みに多額の金銭を引き出す、最終的には偽物とであることが明らか

にされた。

その後はもう一度私が、改宗譚の扱いについて質問を行った。モンゴル帝国の三ハン国はいずれもイスラーム教へと君主が改宗していくわけだが、ムスリム系の史料はいずれもその意義を高く見積もりすぎる傾向にあり、この辺りに関して、東方のキリスト教会の動向から何か考えられないかとの質問であった。プライザーIIカペラー博士の答えは、ビザンツはモンゴルに限らず、長きに亘ってイスラーム教勢力と領域を接してきたのでその対応には歴史があるし慣れていると。しかし、モンゴルに関してはネットワーク構築の途上での改宗であり、これに対してはいずれの教会も苦慮している様子が見られるとのことであった。

最後の質問もロシア史を専門とする学生の方からであった。最終的には収縮していくにせよ、一四世紀において一度はユーラシア大にネットワークを拡張したキリスト教勢力はその経験を、数世紀を経ての世界進出の際に活かしたのかという質問であった。プライザーIIカペラー博士は――「グッド・クエスチョン!」と言った後で――「まずローマ・カトリックに関して、それは確実にあったと答えた。極東においてイエズス会は当初、この時期の史料の記述からその地域の情報を探していた。さらに南中国において当時のキリスト教徒の墓石を探してもいる。この時代の経験

は、その後の教会の思考体系や心象地理を確かに規定している。一方でギリシア正教にはあまりそうした経験を生かした痕跡は見られないとも彼は続けた。もちろん正教も後代、ロシア帝国にとともに東方へと進んでいくわけではあるが、その時の論理は当時とは違うものであったとのことであった。この点については長縄教授から補足があり、実は生かした例もあるのだと加えた。それは具体的にはコーカサス、オセチアであり、一九世紀のこの地域においては、一四世紀の経験が生かされていると言えるとのことであった。

札幌での第二講演も非常に刺激的なものであり、活発な議論がそれを証明している。あらためて、プライザーIIカペラー博士と講演会に参加された全ての方々に感謝申し上げたい。最後に、議論はもとより、そもそも博士御自身を北の大地まで引っ張ってきていただいた小澤教授に今一度深い感謝を捧げる次第である。

註

- (1) 『ローマとカール大帝の彼方』はすでに第四刷を数えている。日本語でもすでに佐藤彰一による紹介がなされている。『西洋中世研究』一一・二〇一九年、一八六—一八七頁。本書で取り上げられる歴史的事実は「西アジア史、インド史、中国史の専門家から見れば取り立てて目新しいものではないであろう」とした上で、「著者の優れた点は、これらヨーロッパ世界の事象を相互に関連づけ、その意味を読み解くのに必要な斬新な着想であり、それを基礎づける広範な知識の涉猟である」と評価している。
- (2) 日本での講演データも全てアップロードされている。
<https://oeaw.academia.edu/JohannesPreislerKapeller>
- (3) Ernst Zehetbauer, *Geschichtsforschung und Archäowissenschaft. Das Institut für Österreichische Geschichtsforschung und die wissenschaftliche Ausbildung der Archivar in Österreich*, Hamburg, 2014.
- (4) 近年英訳が刊行された。著者(すなわち)の英訳が(や)あたりの) 決定版(の)である。Walter Pohl, *The Avars. A Stepp Empire in Central Europe, 567-822*, Ithaca, Cornell University Press, 2018.
- (5) Walter Pohl, *Die Germanen* (Enzyklopädie deutscher Geschichte 57), 2. Aufl., München, Oldenbourg, 2004; Walter Pohl, *Die Völkerwanderung: Eroberung und Integration*, Stuttgart, Kohlhammer, 2002 (2020の改定版が予定)。
- (6) Ian Wood, *The Modern Origins of the Early Middle Ages*, Oxford, Oxford UP, 2013, pp. 313-315.
- (7) 当該時代に関して、当初、古代の継続であることを強調する「古代末期」(late antiquity)という言い方で指示していたことが多かったが、中世に向けての移行期であることに重点を置く「ポスト・ローマ」(Post-Rome)という言い方が増加した。
- (8) サイトは (<https://medieval.vlg.oeaw.ac.at/index.php/medievalworlds/>)。
- (9) キヤサリン・ホームズ(村田光司(訳)、小澤美(解題))「変容するビザンツ? グローバルヒストリーの時代におけるビザンツ研究の新潮流(二〇〇〇—一五〇〇年)」『思想』一一・八、二〇一七年、八七—一〇七頁。
- (10) Jean-Claude Cheynet, “Byzantium”, Benjamin Kedar and Merry E. Wiesner-Hanks (eds.), *The Cambridge World History, Vol. 5: Expanding Webs of Exchange and Conflict, 500CE-1500CE*, Cambridge, Cambridge UP, 2015, pp. 559-585.
- (11) Johannes Preisler-Kapeller, *Die Verwaltungsgeschichte des byzantinischen Armenien von 5. bis zum 7. Jahrhundert* (Entstehung des Themas Armeniakon), Magisterthesis, Wien, 2001.
- (12) 博士論文は前述したが、この重要資料を用いた研究はその後繰り返し試みられた。Christian Gastgeber, Ekaterini Mitsiou, Johannes Preisler-Kapeller, and Vratslav Zervan (eds.), *The Patriarchate of Constantinople in Context and Comparison. Proceedings of the International Conference Vienna, September 12th - 15th 2012. In Memoriam Konstantinos Pitsidis (1944 -*

ウィーン発の中世グローバルヒストリー（小澤・諫早）

- 2012) and Andreas Schminck (1947-2015), Wien, 2017.
- (13) Johannes Preiser-Kapeller and Falko Daim (eds.), *Harbours and Maritime Networks as Complex Adaptive Systems (RGZM Tagungen)*, Mainz, 2014.
- (14) Adam Izdebski and Johannes Preiser-Kapeller (eds.), *A Companion to the Environmental History of Byzantium*, Leiden, Brill, in press.
- (15) 成果の「コンプト」 Walter Pohl, Clemens Gantner, Richard Payne (eds.), *Visions of Community in the Post-Roman World The West, Byzantium and the Islamic World, 300-1100*, London, Routledge, 2016.
- (16) Bruce Campbell, *The Great Transition: Climate, Disease and Society in the Late-Medieval World*, Cambridge, Cambridge UP, 2016.
- (17) K・ポメランス[川北稔(監訳)]『大分岐——中国、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成——』名古屋大学出版会、二〇一五年。
- (18) 「カリフォルニア学派」と彼らによるグローバル・ヒストリーについての批判的な検討が、岸本美緒「グローバル・ヒストリー論と「カリフォルニア学派」」『思想』一二七(二〇一八年、八〇—一〇〇頁)。
- (19) これについてはすでに第三節で言及されている(プロジェクトサイト：<https://climatechangeandhistory.princeton.edu/>)。
- (20) 北海道中央ユーラシア研究会ワークショップ『「四世紀の危機」を問う——文理「融合」ではなく「協働」のために——』北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、二〇一九年一〇月五日。以下に、原田央氏(東京大学大学院工学系研究科)の手になる参加記が掲載されている。原田央「諫早庸一(序)」『「四世紀の危機」ワークショップから考える文理協働』スラブ・ユーラシア研究センターニュース『一五八号』二〇一九年、二二—一八頁。
- (21) この講演についての報告は、開催場所である北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターの英文ニュースレターに英語版が掲載されている(Yoichi Isahaya, “SRC Lecture, “New Rome in a Larger World,” by Dr. Preiser-Kapeller,” *Slavic-Eurasian Research Center News*, 26 (2019), pp. 6-10)。

(小澤：本学文学部教授、諫早：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター助教)